

山王地区における T 邸の建築的特徴

－東京都大田区の歴史的建造物－

日大生産工（学部） ○高橋 さや香 箭内 恒奎 山崎 啓次
日大生産工 篠崎 健一 小島 陽子

1 はじめに

T邸のある山王地区は、東京都大田区の東海道線西側に位置し、海に近く見晴らしが良い静寂な台地にある。明治5年に新橋－横浜間に日本初の鉄道が敷設されると、ドイツ人鉄道技師をはじめとする外国人が多く移り住み、開発された。明治9年の大森駅開設、明治22年の東海道全線開通によって、「八景園」などの娯楽施設が整備され、東京近郊の郊外保養地として発展した。政治家や実業家が住宅を構え、当時少なかった洋風住宅が多く建設された。大正時代には、高級住宅地のイメージが定着したとされる¹⁾。

T邸は、敷地面積250坪、床面積100坪の木造2階建一部地階(RC造)の住宅である。創建時の施主は銀座で金融業を営んでいたO氏で、昭和10年頃にT家の所有となった。戦後はGHQにより接収され、接収解除後もドイツ人への貸し出しが続き、昭和33年にT家が再び住むこととなった。設計は、金子竹三郎で、大正13年の設計図面とその後の改築時の図面が現存している²⁾。本稿では、本年度に行った大田区歴史的建造物の建築調査³⁾に基づき、T邸の建築的特徴について報告する。

2 T邸の建築的特長

主屋は、敷地北側の道路に面して配置され⁴⁾、南側に広い庭がひろがる。北側の塀は、基部に大谷石を用い、大谷石の笠木をのせたスクラッチタイル張りの壁体と、白パイプの高欄をのせた大谷石の腰壁を、交互に並べた構成であり、西側に祠、東側に門を設ける。

主屋の外壁の仕上げは、基部に大谷石、1階部をスクラッチタイル張りとし、窓の上端の高さと、2階との境に建物を四周する大谷石の帯を設け、水平線を強調している。2階部はハーフティンバーとし、縦長窓を連続して配置する。その上に東西・南北方向の寄棟を組み合わせた棧瓦葺むくり屋根をのせる。

1階は、東西31尺、南北33尺の方形平面で、東西にのびる廊下の北側に水廻りと女中室を配置し、南側に客間、食堂⁵⁾、居室を配置する。サービス空間と客や家族の空間を廊下で分けた中廊下式である。特長的なのは、東西の中心線に対して、食堂、階段室、浴室を対称に配置し、半径4尺の半円形平面の浴室を北側壁面に突出させた配置である。北側にみられる浴室の曲面ガラス窓には、格子に緑の葉模様を施した色ガラスを

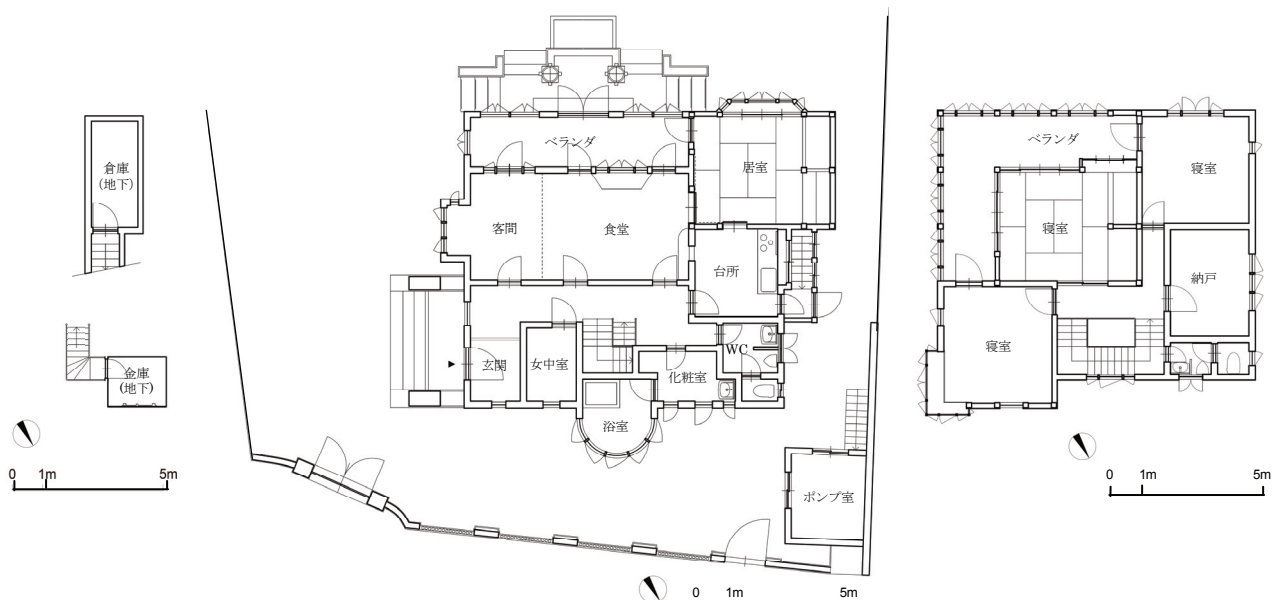


図 1. 地階平面図

図 2. 1 階平面図

図 3. 2 階平面図

Architectural Features of T house in San-no Area

－ Historical buildings in Ota-ku , Tokyo －

Sayaka TAKAHASHI, Koki YANAI, Hirotugu YAMAZAKI,
Kenichi SHINOZAKI and Yoko KOJIMA

嵌め、その上に方形造風のむくりのある庇をのせた象徴的な構成となっている。その上の階段室には、道路に面する踊り場に3つの連続窓を設け、昼顔と小鳥を描いた色ガラスを嵌める。踊り場の西側には洗面所を配置し、階段室から連続する庇を設けて、北側の立面に変化をもたせている。

玄関前のポーチには、棧瓦葺きでむくりのある庇の下に、銅板葺の緩勾配の庇を重ねて設ける。ポーチは、大谷石の基部の上に、スクラッチタイル張りの角柱を両脇に設け、その上部に、大谷石に幾何学装飾を施した箱型の照明をのせる。

南側の庭のポーチも、基部と笠木に大谷石を用い、スクラッチタイル張りの腰壁を設け、その両脇に、方形ブロックと縦溝を施した円柱ブロックを重ねた幾何学的な構成となっており、ライト風の意匠がみられる。

玄関の南側には、客間と食堂を配置し、庭のポーチに面してベランダを設ける。建設当初、客間と食堂は壁で隔てられていたが、GHQに接収された際に取り払われた。客間は、木張りの腰壁とつけ柱を施した格調高い構成となっている。ベランダに面して、ガラス戸、その両脇に同高のガラス窓を設け、それらの上部にもガラスを嵌めた欄間を設ける。続く食堂にも、マントルピースの両脇にガラス戸、上部にガラスを嵌めた欄間を設け、マントルピース上にも、欄間と同高のガラス窓を設ける。両室は、南側のベランダに視線が抜ける、広がりのある空間となっている。ベランダには、ポーチに面して、ガラスを嵌めた格子扉、その両脇に同高のガラス窓、それらの上に高窓を設け、庭からの光が降り注ぐ明るい空間となっている。ベランダと客間・食堂の扉や窓を開くと、庭のポーチからベランダを通して、光や風が室内に入り、明るく開放的な空間となる。



図4. 東立面図

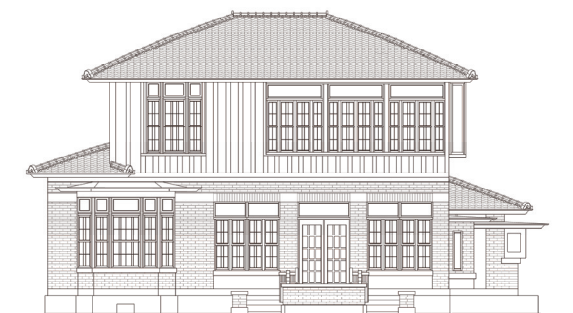


図5. 南立面図

2階は、北東と南西に洋間の寝室、南東に日本間の寝室を配置し、各室をつなぐように矩手の廊下を設ける。日本間の寝室は、床と付書院を設け、南東に矩折れのベランダを廻す。ベランダには連続する縦長窓を設けて採光し、日本間の障子を開けると、ベランダと一体化した寝室に光が差し込み、開放的な空間となる。

北東の寝室は、1階の壁面より張り出し、さらに北東隅に矩折に出窓を設ける。この出窓には花模様を施す板状の横木をわたす。2階壁面はハーフティンバースタイルであるが、この寝室部分では、窓の下の腰壁をスクラッチタイル張りとし、1階の壁面と連続することで、北側立面に変化をもたせている。

3 まとめ

旧帝国ホテル竣工の翌年に建築されたT邸は、塀や玄関と庭のポーチに、大谷石とスクラッチタイルを幾何学的に構成したライト風の意匠がみられる。また、主屋は、1階をスクラッチタイル張りの壁面に大谷石の帯を四周し、水平を強調した構成とし、2階はハーフティンバースタイルに、連続する縦長窓を配置し、その上に寄棟造棧瓦葺むくり屋根をのせる。様々な要素を組み合わせた構成が、この住宅の特徴である。特に、北側は、平面的にも立面的にも変化をもたせた構成であり、色ガラスの窓を配置するなど、道路に面して、意匠性の高い構成となっている。

T邸は、大正時代の山王の優雅な暮らしぶりが伺える貴重な住宅である。

【注及び参考文献】

- 1) 明治時代には、日本館と洋館を併設した住宅や、和風住宅に洋風応接室を付加した住宅が主流であった。ドイツ人の設計による住宅も4〜5棟あったといわれている。社会教育部社会教育課文化財係編集、「大田区近代建築：住宅編1」、東京都大田区教育委員会、大田区の文化財、1991／
- 2) 前掲書1)／
- 3) 大田区歴史的建造物調査会(代表：大川三雄)は、平成28年9月14日にT邸の建築調査を行った。調査員は、大川三雄、内井青蔵、伊郷吉信、大橋智子、小島陽子、勝原基貴、竹田実紅[日本大学大学院生]、白尾仁和[日本大学学生]、我妻宏紀[同]、高橋さや香[同]、箭内恒奎[同]、山崎啓次[同]である。／
- 4) 主屋の北西のポンプ室は、改築時の図面によれば主屋の2階と廊下で連結予定であった。／
- 5) 台所は、改築時の図面にあるように、大きく改変されているが、食堂との境の配膳用の小窓は創建当初のものである。



図6. 北立面図